

チャールズ・レニー・マッキントッシュとジャポニズム その歴史的・文化的背景

平野 恵美子

Charles Rennie Mackintosh and Japonisme:
Its Historical and Cultural Backgrounds

Emiko HIRANO

はじめに：グラスゴーという街

グラスゴーは、イギリスの北部、スコットランドの南西部に位置する街である。スコットランドの首都である古都エジンバラより人口が10万人ほど多く¹⁾、イギリスの中でも大都会だが、不況に苦しんだ1980年代のイギリスの多くの町で感じられたような、黄昏にも似たどこか淋しい雰囲気も漂わせている。それは、かつてこの街が享受したほどの栄華を再び取り戻すことはかなわないと、グラスゴーそれ自身が諦めにも似た気持ちを抱いているからのようにも感じられる。古き良き時代への憧憬を、グラスゴーはそこを訪れる旅人にも感じさせつつ、近年では経済の好転やスコットランド独立に向けた動きから生じる明日への希望もあり、訪問者は過去と未来が交錯する不思議な感覚を味わう場所である。

蒸気機関の飛躍的な改良で知られ、産業革命の進展に多大な貢献をしたジェームズ・ワット (James Watt, 1736-1819) がグラスゴー大学に職を有していたことは、この街が19世紀半ば以降、重工業や造船業などによって大きく発展する土台があったことを示す1つの良い例である。かつて欧州最大の機関車製造会社だったノース・ブリティッシュ・ロコモティヴ社 (The North British Locomotive Company) もグラスゴーにあった (1962年に破綻)。

ブキャナン・ストリート (Buchanan Street) やジョージ・スクエア (George Square) など、グラスゴーの中心地を歩くと、壮麗な建築物の数々に目を奪われる。だが有名な市庁舎や、ウェスト・エンド (West End) にあるケルヴィングローヴ美術館・博物館 (Kelvingrove Art Gallery and Museum) (図1) などの、一見すると歴史的に見える、新古典主義の様式で造られた建物の多くが、実はグラスゴーが大きく発展した19世紀末から20世紀初頭に建てられた比較的新しいものである。そして、こうしたヴィクトリア朝に造られた街並がかえってロンドンなど他の大都市との差異を目立たなくさせる一方で、その「現代性」によって一際異彩を放っているのが、グラスゴー美術学校 (Glasgow School of Art) (図2) やサーキーホール通り (Sauchiehall Street) にあるウィロー・ティー・ルーム (The Willow Tea Rooms) (図3) など、チャールズ・レニー・マッキントッシュ (Charles Rennie Mackintosh, 1868-1928) の設計による建造物の数々なのである。



図 1 ケルヴィングローブ美術館・博物館.



図 2 グラスゴー美術学校 (2014年5月の火災により現在修復中).

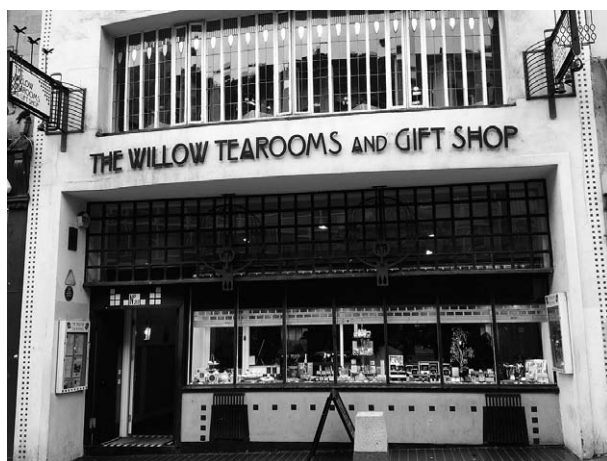


図 3 ウィロー・ティー・ルーム.

1. チャールズ・レニー・マッキントッシュ

マッキントッシュは現代では最も人気の高い、よく知られた建築家の1人であり、彼について既に多くの研究書や一般向けの著作が出ているので、ここではその経歴は初期の部分のみを簡単に紹介するにとどめておく²。マッキントッシュは1868年、グラスゴーで生まれた。父親は警視だった。16歳でジョン・ハッチスン（John Hutchinson）の建築事務所に弟子入りし、同1884年にグラスゴー美術学校の夜学生となった。マッククラウド他が指摘しているように、当時の英国の建築教育の思想は、他の多くの芸術分野同様に、ジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819-1900）の影響を受けていた³。ラスキンの哲学において最大の理想とされたのは「自然」だが、その解釈は芸術家達によって様々だったにせよ、ここから植物を主要なモチーフの1つとしたアール・ヌーヴォー運動との関連性を指摘することは可能だろう。無論、芸術作品における動植物の積極的な採用は、当時ブームになりつつあった、日本の芸術すなわちジャポニズムの影響が大きい。

画家で優れた指導者でもあったフランシス・ニューベリー（Francis Newbery, 1855-1946）を校長とするグラスゴー美術学校で、マッキントッシュは、後に妻となり、作品にも影響を与えたマーガレット・マクドナルド（Margaret MacDonald, 1864-1933）、その妹のフランセス・マクドナルド（Frances MacDonald, 1873-1921）、フランセスと結婚したハーバート・マクネア（Herbert MacNair, 1868-1955）と出会う。彼らは、「グラスゴー派（Glasgow School）」として知られ、あるいは「4人組（The Four）」、「幽霊派（Spook School）」と呼ばれることもある。さらにその他の当時の新進の画家達は、「グラスゴー・ガールズ（Glasgow Girls）」または「グラスゴー・ボーイズ（Glasgow Boys）」という固有名詞がつけられている。グラスゴーにはこのような、スコットランドあるいは英国のアール・ヌーヴォー美術を担う優れた芸術家の集団が存在していた。ヨーロッパのアール・ヌーヴォーの祖は、ウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）の提唱したアーツ・アンド・クラフツ運動（Arts and Crafts Movement）と呼ばれる美術工芸運動であるとされ、そこに先述のラスキンの自然崇拜、労働賛美と鉄などの近代的な素材の重視、歴史主義への反駁、さらにイギリスではケルト様式の復興（Celtic Revival）も影響を及ぼした。

マッキントッシュは在学中に、多くの学校賞を受賞した。1890年にはジョン・ハッチスン建築事務所から、ハニーマン&ケピイ（Honeyman & Keppie）建築事務所へ移った。アレクサンダー・トムスン旅行奨学金（Alexander Thomson Travelling Scholarship）の獲得は、1891年のイタリア旅行を可能にした。この旅行は、18世紀の貴族の子弟の間で流行した「グラランド・ツアー」の性格を帯びていた。つまりしばしば西欧の人々が自らの文化的ルーツを求めてイタリアを訪れ、古代ローマの遺跡やルネサンス以前の遺産から学ぶのである。マッキントッシュにとっていわば土着の文化（たとえその起源がフランスにあったとしても）として培われていたスコティッシュ・バロニアル（Scottish Baronial、「スコットランドの男爵風」）様式から、彼固有のスタイルが発展するための媒体となったのは、中世以前の古代への回帰と、歴史主義への反駁を支えるスティール・モデルン（Steel Modern）のような近代性、そして日本のような遠い第三世界の芸術文化だった。

2. オリエンタリズムとジャンル・ヌーヴォー

ここまで述べたことは、未だ本論に入る前の予備的な内容であるが、ここで断っておかなければならないのは、筆者は建築の専門家でもなければマッキントッシュの専門家でもないということである。筆者の最近の研究テーマの1つは、「ジャンル・ヌーヴォー」という言葉をキーワードに、19世紀末から20世紀初頭の欧州における、東洋人芸術家の活動とそれが西欧人と東洋人の双方に与えた影響についての調査である⁴。18-19世紀末の「オリエンタリズム（東洋趣味）」芸術は、ヨーロッパ人の想像力の中にある東洋に負うところが大きかった。19世紀半ば以降、オリエンタリズムの次の段階は、実際に東洋人が欧州を訪れ交流が増えることによって起こり、西欧人は東洋やアフリカのモチーフを自らの芸術に取り入れた。その後、西欧では、第三世界の芸術とさらに真摯な態度で向き合うようになり、靈感を受け、最終的にその作風にダイナミックな新機軸を与えられることとなった。また、その効果は、元の東洋の芸術にも逆に影響をもたらした。

マッキントッシュの作品を語る時、ジャポニズムとの関連がしばしば論じられる⁵。彼の作風を特徴づけるのは、あのアール・ヌーヴォー調の優美な曲線の他に、「禅」のように余計なものを削ぎ落として、単純化された中にも感じられる力強さである⁶。そしてここには日本の影響があることがしばしば指摘されている。たとえばグラスゴーにおけるマッキントッシュの設計した建築物の中でも最も美しい「ハウス・フォー・アン・アート・ラヴァー（House for an Art Lover）」のフォワイエの黒い壁（図4）と、日本の伝統的な寺や城の一室との類似点を指摘することは難しくない。だがその影響はどのような道筋を辿ってもたらされたものなのか。このことについて、マッキントッシュの著名な研究者の1人であるウィリアム・ブキャナン（William Buchanan）が、詳細な調査を行なっている。また、オリヴァー・チェックランド（Olive Checkland）は、その歴史的背景となる、明治期の日英関係の歴史について、研究の成果を報告している。後者は、既に邦訳書も出ているが⁷、前者については、講演とニューズレターの中で述べられたこともあり、筆者の知る限り、日本ではあまり知られていない。そこで本論文では、まず19世紀後半の日英交流の、特にマッキントッシュの故郷であるグラスゴーに関わる部分に焦点を当て、そのような背景から生じた日本の芸術がどのような道筋を辿り、マッキントッシュの作品の中で昇華したか、チェックランドとブキャナンの調査を中心に考察することに努める。

3. 明治期の日本とスコットランドの交流

19世紀半ばよりめざましい発展を遂げつつあったとはいえ、グラスゴーのようなイギリスの地方都市における日英交流の詳細を調査した者は少ない。だが、1868年の開国以来、富国強兵を目指し、とりわけイギリスの技術に多くを学んだ日本にとって、重工業などの産業によって発展したグラスゴーもまた、重要な都市の1つであり、日本人



図4 「ハウス・フォー・アン・アート・ラヴァー」のフォワイエの黒い壁。

留学生も少なからずいた⁸。以下は主として、チェックランドの著作に依る。

かの有名な岩倉使節団（1871-73）もまた、1872年10月にスコットランド西部を訪れた。グラスゴーで一行は、綿紡工場や蒸気機関車製造工場、水道設備等を視察し、クライド川（River Clyde）河口にある町グリーンノック（Greenock）の造船所を見学した。

岩倉使節団の帰国後、明治時代にヴィクトリア朝のイギリス（主として1890-1914）で学んだ日本人留学生の数は、チェックランドによれば、約500名にのぼり、スコットランドではおよそ100名の日本人が学んでいた。日本と関係の深いイギリス人の中には、スコットランド出身者も少なくない。長崎で商売を営んだスコットランド人のトマス・グラヴァー（Thomas Glover, 1838-1911）は1860年代初期から、出身地のアバディーン（Aberdeen）の学校に日本の生徒達を送り込んでいた。1880-1914年にかけて、グラスゴー大学には約60名の日本人学生が登録していた。その他の学生は、エジンバラ大学またはアンダーソニアン（Andersonian Institute）（現ストラスクライド大学、University of Strathclyde）で学んだ。グラスゴー大学には世界初の造船学教授職が設置され（1883）、日本政府が力を入れていた造船学と海運技術について学ぶのに最適な場所であるという評価を、留学を志す日本人から受けていた⁹。

技術者になるべくしてグラスゴーで学んだ日本人留学生らと、マッキントッシュのような芸術家達の間に、一見すると、直接的な横の関係は無かったかもしれない。だが、文化や芸術の分野における国際交流は、単独で発生するのではなく、技術や経済のような実践的な目的から始まり、総括的な交流の一端として生じるのである。日本人留学生の数は、当時のイギリスと日本の交流がどれだけ進んでいたかということを知る1つの尺度となり得る。

4. 万国博覧会

19世紀と20世紀の変わり目に盛んに開催された万国博覧会は、欧州列強にとって自分達の力を、最も手っ取り早く効果的に、大勢の人に訴えることのできる場所であり、自国の産業と技術力の成果や植民地の産物を陳列・展示するために行なわれた。万国博覧会は、野卑な商業主義、野蛮なナショナリズム、誤った国際主義、熱い帝国主義のごた混ぜだったが¹⁰、国力の誇示と人々の啓蒙に役立った。日本でも欧米にならって、内国勸業博覧会なるものが開かれた。

岩倉使節団による欧州視察の後、日本政府もまた、日本と日本の産業、そして欧米列強と肩を並べることができる近代性をアピールする目的で、欧米での万国博覧会への参加を重視し、1862年以降に開かれたほぼ全ての万博には、日本部門が設けられた¹¹。その費用は日本政府のみならず、個人出資もあった¹²。

万博の成功は、相次ぐ博物館・美術館の創設につながった。1851年のロンドン万博は、経済的にも大成功を収めた。その収入によって購入されたサウス・ケンジントン（South Kensington）一帯は、現在、科学博物館など、博物館がひしめきあっている。サウス・ケンジントン博物館は、1851年のロンドン万博の成果をもとに、1852年に産業博物館として開館した施設である。その初代館長は、イギリスにおける万国博覧会を成功裡に導いたヘンリー・コール卿（Sir Henry Cole, 1808-1882）だった。サウス・ケンジントン博物館は、現在のヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（Victoria and Albert Museum）で、このルネサンス風の歴史主義的な様式で建てられた建物は、実は比較的、新しい。

グラスゴー大学に隣接するケルヴィン・グローヴ美術館・博物館もまた、1888年のグラスゴー万博の収益によって建てられ、1901年のグラスゴー万博の、美術品のパヴィリオンとし

て開館した。この建物もまた、歴史主義的なスペイン・バロック風の様式で建てられている。なお、この時、マッキントッシュは万博パヴィリオンのコンペティションに応募したが、落選している。

1901年、グラスゴー万博が開かれた時、この街は、その造船技術と蒸気機関により繁栄のピークにあった。にもかかわらず、この万博への日本の参加は控えめで、政府としての公式の参加はなく、またその出資額も4万円と控えめだった¹³。これは前年の1900年に、歴史に残るパリ万博が開かれ、その出資額（131万9,000円）が高んだためだろうか¹⁴。

公式カタログによると、グラスゴー万博には、北海道から九州まで全国の製造業者が参加し、陶磁器の他に、食品、七宝、象牙、木工、漆器、綿、絹、和紙などが出品された¹⁵。これらの品々をマッキントッシュも目にしたに違いない。

万国博覧会の日本部門で陳列・展示された日本の陶磁器や漆器は好評を博し、日本の工業産品の欧米への輸出が、貿易ビジネスとして成立し、数多くの美術品が欧州に渡り普及するようになった。それらは、輸出用に大量に生産されたものから、パーミンガムで生産されたもっと手頃な「日本風」の陶器まで、イギリス人の生活に広く浸透した。ジャポニズム、あるいは日本趣味は大流行し、日本に行ったことがない人の家庭でも、日本風の家具や茶器、織物などで装飾されている部屋が見られた。それらの調度品は、ロンドンの百貨店などで購入できたという¹⁶。

5. 実際に日本を見て伝えたイギリス人

グラスゴー出身のクリストファー・ドレッサー（Christopher Dresser, 1834-1904）は、イギリスにおけるジャポニズムの流行に大きな学術的貢献をした1人である。彼は、サウス・ケンジントン博物館の館員で、美術理論家・工業デザイナーでもあり、ジャポニズムについての理解を早くから持っていた¹⁷。

ドレッサーは、近代的な博物館を作ることに関心を抱いていた日本政府から公式な招待を受け、1876年に日本へやって来た。3ヶ月以上に及ぶ滞在中、日本人を指導し、イギリスとの貿易発展のための助言をした。それだけにとどまらず、公的なサポートを受けていたドレッサーは、日本の美術産業の奥深くまで知る便宜に恵まれ、これに対する理解を一層深めた。イギリス帰国後、ドレッサーは、日本美術の啓蒙者となり、『日本、その建築、美術、美術工芸（Japan, its Architecture, Art, Art-manufactures）』（1882）を著した。ドレッサーは、「効率と美は不可分ではない」という主張の持ち主であり¹⁸、彼の、「産業に応用される芸術」という考えは、自然を工芸品に応用する日本美術の洗練を受けて、装飾主義と相反することなく、後にマッキントッシュの建築やアール・ヌーヴォー芸術の根底に注ぎ込まれた。ドレッサーの理論が、「装飾は建築から発生する」という信念にもとづいていたのも、偶然ではないだろう。

マッキントッシュの直系の祖先とは言えないかもしれないが、日本における西洋建築術の移植に大きく寄与したジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 1852-1920）のことも、少しでも触れておきたい。

1877年、お抱え外国人として来日したコンドルは、鹿鳴館や古河邸の設計を手がけ、また辰野金吾（1854-1919）ら日本人の西洋建築家を育成した。彼は西洋建築術を日本人に指導するために来日したが、自身も日本の文化に深く傾倒した。日本人女性と結婚し、最終的に日本の地に身を埋めた。日本画や生け花を深く学び、『日本の花々と華道（The Flowers of Japan

and The Art of Floral Arrangement)』(1891)などの著作を著した。また、頻繁に日本の建築物に関するレポートをロンドンに送った。

コンドルとドレッサーは、日本人に近代技術を指導するために日本へ招聘されたが、日本の工芸美術を正しく理解し、ジャポニズムがイギリスにおける産業と商業の分野で重要な地位を占めるようになるための、橋渡し役となった。

6. グラスゴーのジャポニズム

グラスゴーにおけるジャポニズムの普及に大きく貢献した1人は、アレクサンダー・リード(Alexander Reid, 1854-1928)である。グラスゴー出身のリードは、パリで美術商として働いており、フィンセントとテオのヴァン・ゴッホ兄弟と仕事をし、1887年には同じ家に住んでいた。パリでは、1870年代にサミュエル・ビング(Samuel Bing, 1838-1905)の開いた画廊が、日本美術ブームを牽引していた。ビングは、『芸術の日本(Le Japon Artistique)』誌を創刊し、日本美術の普及に努めた。同業のテオ同様、リードは印象派と日本美術に関心を持っており、日本の版画を多く購入した。リードは1889年初頭にグラスゴーに帰り、画廊を経営した。リードの商売は、グラスゴー・ボーイズとグラスゴーの豊かになりつつあった中産階級が、日本の版画や印象派の作品を購入することを可能にした。リードがいなければ彼らにはその機会さえ無かっただろうと、チェックランドは述べている¹⁹。

ホイッスラー(James Whistler, 1834-1903)もまた、ジャポニズムとグラスゴーを結びつける、重要な画家である。ラスキンとの裁判で知られるホイッスラーは²⁰、自分の画風に、日本的なモチーフを取り入れ、人気を博した。1891年、ホイッスラーの描いた『グレーと黒のアレンジメント—トーマス・カーライルの肖像(Arrangement in Grey and Black: Portrait of Thomas Carlyle)』(図5)は、グラスゴー市が公式に購入した第一号のホイッスラー作品となった。これはグラスゴー・ボーイズの強いリクエストによって、グラスゴー市が購入したものであり、ホイッスラーの作品に公的な評価を与えることとなった。と同時に、新しい芸術の拠り所を模索していたボーイズが評価していたホイッスラーが、公的に認められたという点で、グラスゴーの近代美術史を考える上で、象徴的な出来事でもある。

ホイッスラーの初期の作品を見ると、同じジャポニズムでも大きな変化が見て取れる。例えば1864年に描かれた『紫とバラ色—6つの印のランゲ・ライゼン(Purple and Rose: The Lange Leizen of the Six Marks)』(図6)は、日本風の髪型と着物のようなものを身につけた西洋人の女性と東洋風の陶器が描かれている。だがこの作品は、単に日本あるいは東洋風の品々を画面に鏤めただけで、それ以上の創意工夫はあまり感じられない。しかし、1873年の『カーライルの肖像』は、その簡潔な画面、静謐さ、墨絵のようなモノトーンに近い色調等に、ホイッスラーの中で咀嚼され、新しい

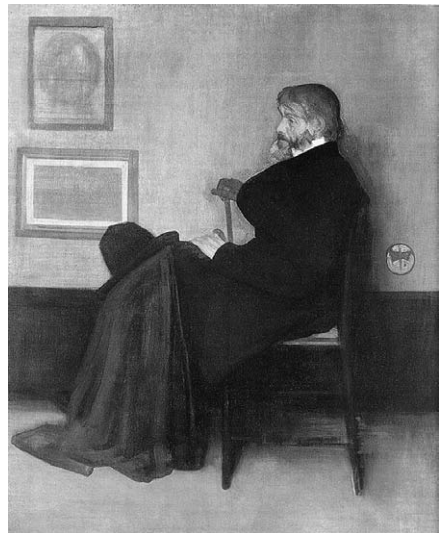


図5 ホイッスラー、「カーライルの肖像」。

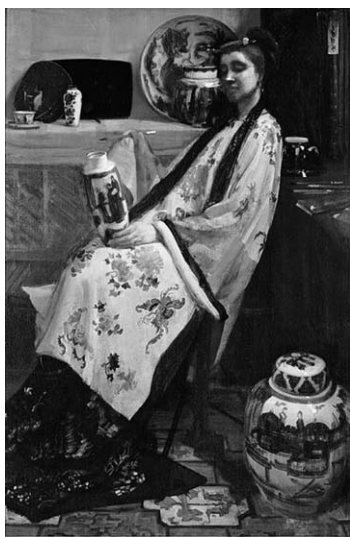


図 6 ホイッスラー、「紫とバラ色—
6つの印のランゲ・ライゼン」。

様式となった日本の美の名残が感じられる。ブキャナンは前者を単なる「日本趣味 (Japonaiserie)」であり、後者こそ「ジャポニズム (Japonisme)」だとして区別した²¹。

アメリカで生まれながら、パリとロンドンでジャポニズムの洗礼を受けたホイッスラーは、自身とスコットランドの繋がりを強く意識していた。ホイッスラーは、1849年に初めてグラスゴーを訪れた。18世紀半ばにスカイ島 (Isle of Skye) から米国ノース・カロライナに移住した母方の祖先の名を取って、自分のミドル・ネームを、Abbott から McNeill に変えた。「Mc～」というのは、典型的なスコットランド人の姓である。ホイッスラーは晩年、グラスゴー大学から名誉博士号を授与され、これを大いに喜び、誇りに思った²²。

7. マッキントッシュとジャポニズムの影響

以上のような背景を踏まえ、次に、主としてマッキントッシュ協会のニューズレターに掲載されたブキャナンの講演報告に基づき、マッキントッシュと日本美術の具体的な接点について述べる。

世紀の変わり目、すなわち1901年のグラスゴー万博が開催された頃、日本美術は既にグラスゴーの人口に膾炙し、ホイッスラーの作品を購入する余裕が無くても、北斎、歌麿、広重などの版画は、安価な値段で手に入れることができた。また、画家達は自分の絵を売るよりも安く、版画以外にも、日本の刺繍製品や陶器などを買うことができたという²³。

1882年、グラスゴーで、ペルシアと日本の装飾芸術の展覧会が開かれ、先述のドレッサーが故郷で講演を行なった。これは彼の記念すべき『日本、その建築、美術、美術工芸』が出版されたのと同年にあたる。これに先立つ1878年には、日本政府からグラスゴーに、ドレッサーの日本滞在の返礼として、陶器、織物、和紙が寄贈されていた²⁴。

グラスゴーには、日本の伊万里や七宝、金銀糸細工などを輸入する店が少なくとも一軒はあった。だが、独自の七宝を生産販売している店もあった。1889年、グラスゴーに戻ったリードが開いたばかりの画廊で、北斎とその弟子達の作品を含む日本の版画展が開かれた。当時、マッキントッシュは、ハニーマン&ケピイ建築事務所で製図工として、働いていた。1891年には、先述の通り、ホイッスラーの『カーライルの肖像』が購入され、マッキントッシュはこうした日本の美術品や、ジャポニズムから昇華したホイッスラーの作品を目にしたはずである。

グラスゴー・ボーイズの中では、エドワード・ワルトン (Edward A. Walton, 1860-1922) が、日本の版画のコレクションを持っていたことが知られている。それらは、ワルトンのキャンブスケネス (Cambuskenneth) のアトリエに飾られていたので、ボーイズの仲間たちもそこに滞在した際、目にしただろうと考えられる。

1889年11月にグラスゴー美術クラブ (Glasgow Art Club) の主催で開かれた仮装舞踏会に、ワルトンは北斎の仮装をして現れた。この時、他の参加者の中にも、ホイッスラーとその絵画の中の人物を装った者がいた²⁵。

同じくグラスゴー・ボーイズの画家であるジョゼフ・クロウホール (Joseph Crawhall, 1861-1913) も日本の版画を購入した²⁶。彼の「浮かび上がる鱒 (Trout Rising)」(図7)は、日本美術の影響を受けている、というよりもはや模倣に近い。



図7 ジョゼフ・クロウホール、「浮かび上がる鱒」。

このように、ボーイズやマッキントッシュを始め、スコットランドの画家達は、日本の版画を容易く手に入れ、これに十分馴染みがあった。リードの画廊以外でも、

1893年に日本の骨董品や版画の展覧会が開かれた。翌年には、同じ画廊のオーナーによって、グラスゴー美術クラブの階段に、12枚の日本の版画が掲げられた。この版画は今日まで(少なくともブキャナンの論文が発表された1980年までは)クラブの階段室に飾られている²⁷。

その頃までに、ボーイズのうちの少なくとも2名が、実際に日本を訪れていた。ジョージ・ヘンリー (George Henry, 1858-1943) とその親しい友人のエドワード・ホーネル (Edward A. Hornel, 1864-1933) である。リードがその旅行の金銭的な援助をした。

1895年、リードの画廊で開かれた、ホーネルの手による日本を描いた作品の展覧会は大成功を収め、『ステューディオ (Studio)』誌にも好意的な評が載った²⁸。当時、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、そして日本でも芸術雑誌の発行が盛んだった。1893年創刊の美術工芸雑誌『ステューディオ』は、当初からグラスゴー・ボーイズを擁護し、後にマッキントッシュとウィーン分離派とを結びつけた。マッキントッシュと4人組は、ホーネルの展覧会を観たであろうし、批評も読んだに違いない。

マッキントッシュが、グラスゴー美術学校新築のコンペティションで優勝したのと同じ1896年、リージェント・パーク広場 (Regent Park Square) 27番地にある彼の住まいの寝室の暖炉の上に、2枚の日本の版画が飾られているのが、写真に撮られている。当時、マッキントッシュが日本の美術に関心を持っていたことが窺えるし、それゆえ、グラスゴー美術学校の建物にしばしば日本の影響が指摘されるのは、全くの偶然とは言えないだろう。

マッキントッシュは、『ステューディオ』を購読していたから、オランダ公園 (Holland Park) の家についての記事も読んでいた。この家は、アングロ日本風様式で造られており、そのビリヤード・ルームは、グラスゴー美術学校の会議室の円形の照明によく似ている。スコットランドでは、建築家のウィリアム・リーパ (William Leiper, 1839-1916) が、1896年にオーキテラルダー (Auchterarder) のコレアーン城 (Colearn Castle) のデザインに用いている。リーパはこの照明の様式を、ヘレンズブラ (Helensburgh) の自宅「タパーシー (Terpersie)」や、1872年のケーアンドゥ・ハウス (Cairndhu House) にも施している。マッキントッシュの最も有名な作品の一つであるヒル・ハウス (Hill House, 1903) は、ヘレンズブラにあり、この家にも微かな日本風を見て取ることができる。また、しばしばバラのモチーフを用い、華道にも関心があったマッキントッシュとその妻のマーガレットは、1897年の

『ステューディオ』に掲載された、日本の華道についての記事も読んだであろう²⁹。

マッキントッシュの作品中に用いられた日本的な意匠のルーツについて、ブキャナンは具体的な比較と推測を行なっている。

グラスゴー美術学校は、スコットランドの城と日本的な雰囲気との両方を併せ持っている。建物正面の曲線を描く鉄製のレールとそこに取り付けられたパネルの装飾的な意匠は、「紋」のようである(図8)。それはステンシルのように、金属製のプレートからカットされたものである。『ステューディオ』

には、「日本のステンシル(伊勢形紙)」についての記事が掲載されたので、マッキントッシュはこれを参照した可能性がある。また、グラスゴー美術学校の図書館は、1887年に日本美術に関する書籍を大量に購入し、その中に、日本のステンシル(伊勢形紙)の複製画の本があった。口絵には、本物の日本の伊勢形紙を用いている。いずれにせよ、マッキントッシュは、ステンシルが得意だった。

1902年のタリン万博で、マッキントッシュは現地でステンシルによるバナーをデザインした(図9)。それは、日本の柱絵と同じ比率で造られているが、そこに描かれた少女は、柱絵で有名な鳥居清長(1752-1851)の描いた女性よりもっと縦長に引き延ばされ、ずっと様式化されている。この様式化された、抽象画に近づくようなボールを持って向かい合う少女は、ケンジントン・ガーデン(Kingsborough Gardens)14番地の、ローワット夫人(Mrs Rowat)(ニューベリー校長の母親)の家(1902)の暖炉の向かい側に備え付けられた2つのキャビネットのためのデザインにも用いられている。これらの2つのキャビネットは、ハンテリアン・アート・ギャラリー(Hunterian Art Gallery)の、マッキントッシュ・ハウス(The Mackintosh House)の客間で見ることができる。抽象化された少女と銀色の背景は、1794年に鳥文斎栄之(1756-1829)の描いた浮世絵の縦長に引き延ばされた遊女と、キラ(粉末状の雲母)を用いた銀色の背景との共通点が見出せる。

この他に、ヒル・ハウスには、障子と同じ比率の窓があり、暖炉のある部屋の照明は日本的雰囲気を醸している。これは、歌川



図8 グラスゴー美術学校の正面に取り付けられた、日本の伊勢形紙のような装飾的なパネル。

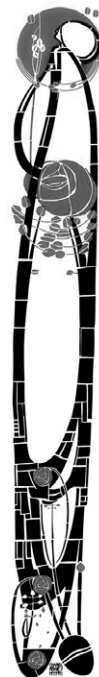


図9 1902年のタリン万博のための、マッキントッシュのデザインによるステンシル・バナー。

国貞（1786-1865）が1850年に描いた灯りのロウソクを調節する遊女（1850）の絵を参考にしていると思われる。また、グラスゴー美術学校の図書館の設計中に、マッキントッシュは、日本の建築物の写真集の中の神社を見たのではないかと指摘されている。マッキントッシュは、美しい水彩画も残しているが、植物を描いた水彩画は、1894年の『ステューディオ』に載った日本の植物彩画に影響を受けているのではないだろうか³⁰。

マッキントッシュの家の、暖炉の炉棚の中央には、日本の刷り物の傑作が2枚飾られていた。1つは、五渡亭国貞（歌川国貞＝三代目歌川豊国）の『朝比奈三郎』の登場人物の娘（1825）であり、もう1つは、柳川重信（1787-1832）の三味線を稽古する娘である。マッキントッシュはこれ以外にも、歌麿主題の溪斎英泉（1790-1848）か菊川英山（1787-1867）の版画を持っていた³¹。

マッキントッシュは、エドワード・モース（Edward Morse）の『日本の住まい：内と外（Japanese Homes and Their Surroundings）』（1885）を持っていたらしい³²。モースは、日本の家屋のまばらな内装と、西欧の内装を比較している。日本趣味の部屋（Japonophile's room）、すなわち陶磁器や掛け軸などの日本の物で埋め尽くされた部屋は、結果として全く日本的でなくなる。だが、マッキントッシュのオリジナル・デザインの部屋は、空間、光線、静けさにおいて、日本の家屋の内装の哲学にもっと近い（図10）。これは先述のホイットラーの、『紫とバラ色』と『カーライルの肖像』との違いについて言えるのと同じ現象である。

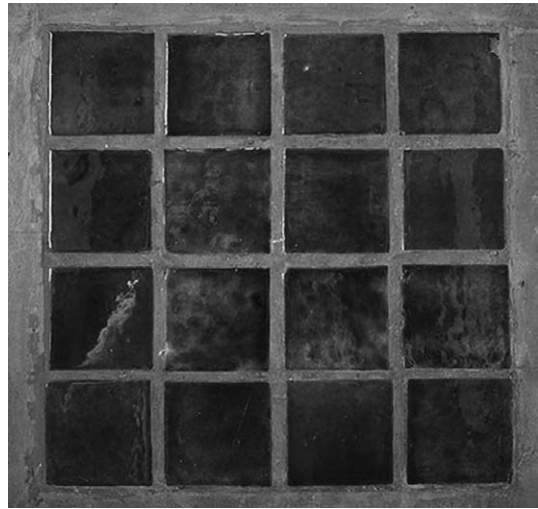


図10 グラスゴー美術学校の、障子を思わせるような窓のデザイン。

結 び

以上、マッキントッシュとジャポニズムの関係について、グラスゴーを中心に、日本とイギリスの交流の歴史を背景に考察を行った。

開国後の明治期日本は、英国から多くを学んでおり、当時、めざましい発展を遂げつつあったグラスゴーとも、人的・文化的交流が活発に行なわれていた。それは後に、欧州で広がりつつあったジャポニズムがマッキントッシュの作品に影響を及ぼし、やがてそこから彼自身のスタイルが生まれるための、必要不可欠な歴史だった。本論文では、これまで個別に論じられがちだった、政治・経済と文化交流の相関関係を、一定程度明らかにすることができたと考える。

筆者自身の研究に引き寄せて論じると、19世紀末から20世紀初頭ヨーロッパにおける、アール・ヌーヴォーや象徴主義運動の発生から発展という縦軸に、日本やアジア、アフリカといった第三世界の芸術文化の影響が横軸となって交わるという現象が、形は少しずつ違えども、各地で同時多発または時間差を伴って起きていたことが改めて確認できた。ロシアで言えば古代ルーシ、スコットランドでは古代ケルトのような古代回帰、自然主義と産業や工業の発展に伴う新しい素材や機械への憧れ、労働の賛美と耽美主義のような、一見すると矛盾する要

素が組み合わさったり反発し合ったりすることによって、これら全てが、行き詰った西欧文明に新機軸を与え、新しい芸術の潮流が生まれるための強力な媒体となった。そこに東洋の芸術がさらに大きな影響を及ぼした。また、今回あまり取り上げなかったが、『ステューディオ』の他にも、『スコティッシュ・アート・レビュー (The Scottish Art Review)』や、ロシアの『芸術世界 (Mir iskusstva)』誌のような、芸術雑誌が果たした役割も見逃せない。これは今後もっと深く比較研究していきたい。

本論中で論じたように、単なる「日本趣味」から、ホイッスラーの『カーライルの肖像』や、マッキントッシュのステンシル・バナー、グラスゴー美術学校といった作品のように、芸術家の中で昇華したジャポニズムは、新しい芸術様式を生み出した。今回の論文はここで一旦、筆を置くが、今後はこれが東洋の芸術にどのようにフィードバックされて、次の段階に進むのか追跡調査してく。それをこれからの研究の課題の1つとしたい。

地名・人名は、日本語表記の後、必要と思われる限りできるだけ原語を併記した。人物は、可能な限り生没年も併記した。

資料の提供に関し、マッキントッシュ協会 (Charles Rennie Mckintosh Sociey) から多大なご厚情を頂いた。

本研究は、JSPS 科研費 (25370160) の助成を受けたものである。

引用文献

- Buchanan, William. *Japanese Influence on Charles Rennie Mackintosh*. Newsletter. Charles Rennie Mackintosh Society. No. 25. Spring 1980.
 オリーヴ・チェックランド『明治日本とイギリス—出会い・技術移転・ネットワークの形成』(杉山忠平・玉置紀夫訳)、法政大学出版局、1996。(Checkland, Olive. *Britains Encounter with Meiji Japan, 1868-1912*, 1989.)
 Checkland, Olive. *Japan and Britain after 1859- Creating Cultural Bridges*. RoutledgeCurzon, 2003.
 ロバート・マックラウド『マッキントッシュ—建築家として・芸術家として』(横川善正訳)、鹿島出版会、1993。(Macleod, Robert. *Charles Rennie Mackintosh: Architect and Artist*, revised edition 1883, first published 1968.)

¹ 2011年のエジンバラの人口が495,360人であるのに対し、グラスゴーは598,803人であった。

² ここで紹介するマッキントッシュの経歴は、主としてロバート・マックラウドに依る。

³ マックラウド、p. 37.

⁴ 「ジャンル・ヌーヴォー」という用語は、リン・ガラフォラ (Lynn Garafola) が *Diaghilev's Ballets Russes* (1989) の中で、バレエ・リュスの有名な振付家であるミハイル・フォーキン (Michel Fokine, 1880-1942) の東洋的な主題に対するアプローチについて述べる際に用いた (p. 13)。

⁵ 本論文中で紹介する Buchanan 他。

⁶ zenという言葉は欧州では、本来の仏教の禅の思想から離れて、しばしば単に「格好いい (cool)」と同義語で用いることがある。

⁷ 引用文献表参照。

⁸ この論文を執筆している2014-2015年にその生涯がテレビドラマ化された。国産ウイスキーの創造者である竹鶴政孝 (1894-1979) もまた、時期はやや後になるが、グラスゴー大学で有機化学と応用化学を学んだ (1918-1920)。チェックランドは、竹鶴の評伝も著している。

⁹ チェックランド、180頁。

¹⁰ Checkland, p. 14.

- ¹¹ チェックランド, 263 頁.
- ¹² Checkland, p. 17.
- ¹³ Checkland の本文中には, 「5 万 7,000 円」という記述もある. (p. 22.)
- ¹⁴ Checkland, p. 17.
- ¹⁵ Ibid., pp. 213-215.
- ¹⁶ チェックランド, 258-259 頁.
- ¹⁷ ドレッサーの役割を, アメリカ人のアーネスト・フェノロサ (Ernest Fenollosa, 1853-1908) と比較することができるかもしれないが, 本論文は主としてイギリス, 特にスコットランドと日本の関係を扱うので, 今回は特に論じない.
- ¹⁸ チェックランド, 265 頁.
- ¹⁹ Checkland, p. 118.
- ²⁰ ホイッスラーの『黒と金のノクターン—落下する花火 (Noctune in Black and Gold—The Falling Rocket)』(1874-1877) に対する批判は, ラスキンのニュースレター “Fors Clavigera” に掲載された (Ruskin. *Fors Clavigera: letters to the workmen and labourers of Great Britatin*. 1877). ホイッスラーがラスキンを名誉毀損で告訴し, ラスキンは敗訴した. だが, 罰金は 1 ファージングだけだった.
- ²¹ Buchanan, p. 3.
- ²² Checkland, p. 117.
- ²³ Buchanan, p. 3.
- ²⁴ Ibid.
- ²⁵ Ibid., p. 4.
- ²⁶ Ibid.
- ²⁷ Ibid.
- ²⁸ Ibid.
- ²⁹ Ibid.
- ³⁰ Ibid., p. 6.
- ³¹ Ibid.
- ³² Ibid., p. 5.